

異年齢集団で人とかかわる力を育てる

—第3・4学年複式「いもパーティーをしよう」の実践を通して—

秋 山 哲

1 異年齢集団のよさを生かした複式集会活動

本校の複式学級は、各学年男子4名女子4名の児童が在籍しており、低学年・中学年・高学年の3学級で構成されている。一つの学級の中に2つの学年があり、日常生活をこの異年齢集団で送っている。また、3学級合同で縦割りのグループをつくり、複式学級全体の活動も行っている。

4月の一年生を迎える会、10月の帝釈小学校との交流（年に一度の直接交流を行っている）は高学年の子どもたちを中心に会を運営してきた。そして、春の苗植えから収穫、収穫したいもを使つてのパーティーは複式中学年の子どもたちを中心に、3月の6年生を送る会は、低学年を中心に運営してきている。いずれの学級も一度は中心となって複式全体の集会活動を企画する機会をもつことができるようにしている。それは、こうした異年齢集団の活動を通して、自分のことだけでなくまわりのことにも目を向けることのできる態度が育つと考えているからである。同年齢の子どもの中では固定すると難しい教えたり教えられたりの関係が、異年齢集団においては当然のこととして成り立っている。また、6年間継続して取り組むことにより、学年が進み上学年と下学年を経験する中で、どの子にもリーダーとなる機会が巡ってくる利点がある。中学年において活動の企画立案を経験することで、上学年、下学年という自分たちとは違う年齢の子どもたちのことを考えることを通して、人とかかわり方を学ぶよい機会になると考えている。子どもたちが集会を楽しむ工夫をしていく中で、集会を運営するための心配りや準備にかかる苦勞、楽しい会にするための工夫などについて気づいたり、自分たちの願いと参加者の願いの両方を考えなければならないことに気がついたりできるのではないかと考えている。

また、異年齢集団による集会活動が、子どもたちの願いを実現するための機会として、伝統的に繰り返される中で新たな企画や工夫が生まれ、複式学級の子どもたちが年々高まっていけるよい機会とも捉えている。

2 総合的な学習としてのねらい

本校の総合的な学習（人間領域）では、「人と人とかかわりを通して、自分自身を見つめ人間としてともによりよく生きていこうとする子どもを育てる」ことをねらいとしている。複式の集会活動においても、異年齢集団でのかかわりを通して自分の果たすべき役割やまわりの人の気持ちを考えた行動のできる子どもを育てることをねらっている。縦割り集団では、同年齢の集団に比べて年齢による役割分担が明確である。しかし、いつも企画する者と参加する者が同じでは、かかわり方が一様なため多くの成長を期待できないと考えている。そこで、どの学年も複式集会において中心的な役割を果たす機会を設けることで、学年に応じた多様なかかわりを生み出すことができるのではないかと考えた。本実践の「いもパーティーをしよう」は、春から秋にかけて6ヶ月の期間を要する活動であり、子どもたちが試行錯誤を繰り返す中で成長していくことのできる機会に恵まれている。また、5・6年生をアドバイザーとすることで、高学年の下の学年を考えた行動や他者への気配りにも学ぶことの多い活動といえる。中学年の子どもたちが、どのように企画し運営していくか、いくらでも工夫の余地があるところに本単元のおもしろさがあると考えている。

3 いもパーティーの実践

複式中学年の計画する全体集会は、次のような手順で行った。

- ① さつまいもの苗を植える → ② さつまいもを掘る → ③ パーティーの計画を立てる
④ 買い物に行く → ⑤ パーティーをする

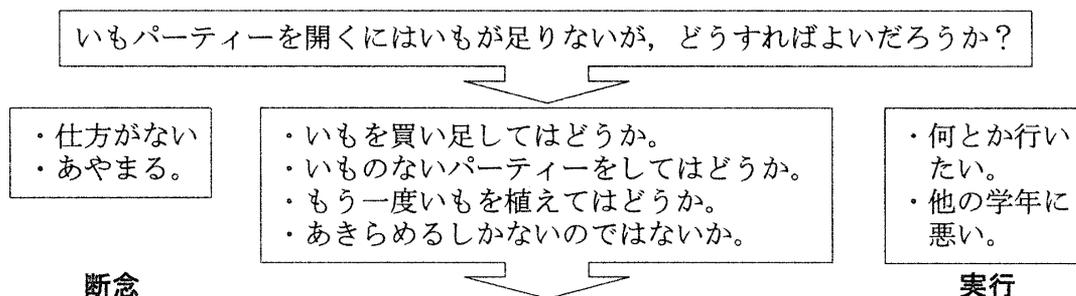
(1) さつまいもの栽培

まず、草抜きがたいへんであった。いもの植え方や育て方について低学年の子どもたちにどのように説明するかが話し合われた。説明や会の進行は4年生が中心となり、3年生は次の複中のリーダーとしてしっかり会の様子を記憶に留めてほしいと考えた。その結果、いも植え会を終えて以下のような気づきができたことは、自分たちが会を運営する主催者なのだという意識の現れだと考える。

- ・会を進行するのは4年生であったが、縦割り班の人を並べたりみんなを静かにさせたりしたのは高学年であった。
- ・会の進行に協力できなかった。(3年生の中での反省)

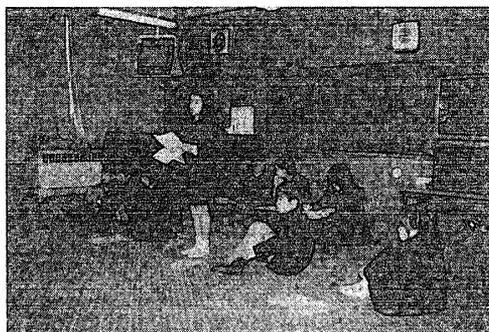
こうした意識は、ペットボトルを持って何回も畑に往復することが日課になった水やりや、夏休みの間に草に覆われた畑を見ても世話をあきらめなかった態度など、長い栽培を等して様々な場面でみることができた。

(2) 対策会議（試行錯誤の時間）



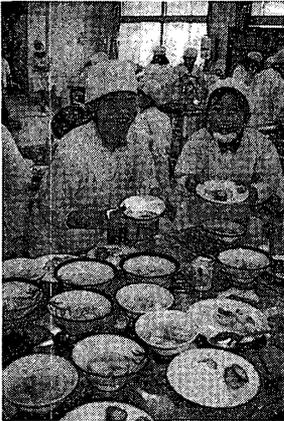
結局、サツマイモをジャガイモに変えていもパーティーができることになった。苦肉の策ではあったがこの経験の中で「自分たちが我慢することは仕方がないが、楽しみにしていたいもパーティーをほかの学年までできなくなるのは？」という意見が多くでてきたことは収穫であった。

(3) いもパーティー



いもパーティーの計画は、4年生が立案し複式集会で話し合った。写真はそのときのものである。提案のためのプログラム作りやメニューを決めるための資料集め、料理の作り方に、買い物の決まりなどこれまでに経験したことを生かして、手際よく行うことができた。

買い物の計画を記入するための用紙をパソコンで作ってきたり、説明の分担をしたり、対策会議での経験を生かして手際よい運営が出来ていた。他の学年への連絡も、高学年に料理の資料集めを手伝ってもらったり、1年生に会の後感想を聞くことを伝えに行ったり、考えられることを頑張る姿が見られた。4年生が中心の活動であるが、話し合いに参加し実際の動きを見ることで、企画・運営の仕方を3年生が学ぶ絶好の機会であった。



左の写真は、料理作りの様子である。高学年と中学年で各班に配る料理を盛りつけているところである。高学年が、家庭科室の使い方がわからない低学年の子どもたちに道具がある場所を教えたり、包丁の使い方や後かたづけの方法などを示したり大活躍であった。

いもパーティーの企画や運営は、中学年で行ったが、縦割りグループでの話し合いや料理作りの中では、高学年が中心になってグループをまとめた。中には、事前に家で料理作りを試してきた子もいて、上学年として責任を果たしていた。どの学年にも子どもたち自身で会を進める気持ちがよく現れていた。

今年のオリジナルとして、プログラムの中に給食室におられる栄養士の



先生に自分たちの創作料理について聞く計画を立てた。左の写真は、パーティーの最後に講評をいただいているところである。また、創作料理をいつでも作れるようにレシピを紙にまとめた。それを見ながら次に何をすればよいか考えている子どもの姿も見られた。各班の作った料理をみんなに味わってもらうために班の数だけ用意して配り、料理に関係したクイズを出すなど会食時にも工夫が見られた。

4 実戦を終えて

異年齢集団での活動は、同年齢集団の活動にはないよさがある。上学年は、何度も活動を経験しており、活動の見通しをもつことができる。また、下学年は上学年の姿をよく見て次の活動に生かすことができる。中学年で話し合いにおいて、前年度の提案プリントを用意してくる子どもがいたり、中学年の主催行事でありながら事前に料理を作って練習してきたり、料理作りのための資料として本や雑誌を用意してきたりしている高学年の子ども姿を見ることができたのはうれしいことであった。また、計画を立てる段階で今年のオリジナルが出したいという子どもたちの願いが、創作料理のレシピ作りや栄養士の先生に食べていただいて批評してもらうというアイデアになったことに感心させられた。

最初のサツマイモ作りを失敗した経験から、ジャガイモ作りという新たな挑戦を考えることができたのも「何とか成功させたい」という子どもたちの願いがあったからである。栽培から料理までという長い期間を通しての試行錯誤が、失敗を経験として次に行かず機会を与えてくれていると考えている。

複式の縦割活動は、学級に上学年と下学年が存在することで、よき伝統となって引き継がれやすい環境にあると考える。必ず上の学年のがんばっている姿を下学年が見ているからである。教師の「次は3年生の番だからね」の一言で3年生は実によくがんばるのである。また、4年生はいつも自分たちが中心になって活動することで、3年生によいところを見せようという気持ちもまたはきるのである。異学年の集団を抱える複式学級にあっては、上の学年に活躍の場を与え、下の学年に次の活躍の場を約束することでお互いが協力し合い、認め合っていける関係を築くことができる。教師は、上学年の活動を支援し成功の達成感が味わえるようにし、下学年には上学年の努力している姿を紹介することが大切といえよう。中学年の段階で、高学年を含めた縦割活動を中心になって企画運営する機会を経験することは、たいへんさとやりがいの両方を経験できるという意味で大きな意味がある。それは、これらの経験が子どもたち自身に自らの力で物事をやり遂げるための一つの大きな学習として残るからである。その意味で、子どもたち自身に企画運営をまかせる活動を設けること、試行錯誤ができるだけの十分な時間を用意することが、教師の大きな一つの支援であるといえる。